

礼拝さいこう

新型コロナウイルスに直面して教会は・・・⑤

教会音楽室長 江原美歌子

さまざまな集会や研修会でよく聞かれる言葉に、「これまでの二元論的理解でなく」というものがあります。「あれか」「これか」に限定してきたことに、このコロナウィルス感染を経験する中で、その枠を大きく2つに分けて考えることには限界があることを知らされます。先日「聖歌隊はいっつ再開したらよいのでしょうか？」の問いを受けましたが、今ほど、答えが何通りもある時代はないと痛感させられています。教会でわかちあわれているみことばと祈り、集う人々ととりまく環境、どのような経験や考え方が共有されているか等々の語りあいを通して方向性が示されていくことだからです。今号も様々な事例紹介を通して、そこでの気づき、祈り、課題、何が示されているのか？の声に傾聴し、私たちの教会は？の応答、対話となることを願っています。

Index

1)	「新型コロナ感染拡大の中での『教会』」	叶義文（大牟田フレンドシップ）
2)	「共に礼拝する」	吉村朋大（緑の牧場）
3)	「コロナ危機から示されたこと」	下川俊也（大阪）
4)	「その時を待ち焦がれつつ」	宮西千晴（富士吉田）
5)	「歌わでやあるべき すくわれし身のさち」	宮原淑子（百合丘）
6)	「新型コロナウイルス危機での礼拝の取組み」	稲見元彦（福生）
7)	「コロナウィルスという出来事」	村上悦二（秋田）
8)	「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」	エイカーズ 愛（小樽）
9)	教会の事例紹介を受けて～応答コメント	濱野道雄（鳥栖）
10)	アメリカ・カナダ賛美歌学会大会報告	江原美歌子
11)	「きたかん奏楽者ひろばに参加して」	和田温子（東海）
12)	「礼拝の動画配信と賛美歌著作権」	田坂元彦（横浜ニューライフ）
13)	礼拝と賛美歌著作権Q & A	教会音楽室
14)	「第5回教会音楽カフェ」感想、「第6回教会音楽カフェ」開催のご案内	
	「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」のご案内	

新型コロナウイルスに直面して教会は…

「新型コロナ感染拡大の中での『教会』」

新型コロナウイルス感染拡大から、1年半の月日が流れました。世界中で2億1千万人を超える人たちが感染し、450万人以上の方々が亡くなっていることを考えると、いかに深刻な状況なのかがわかります。ワクチンが手に入る国や入らない国、トリアージが議論される時その基準は本当に平等なのかなど様々なことを考えさせられます。

さて、昨年4月緊急事態宣言が出されて、大牟田フレンドシップキリスト教会でも他教会と同様、様々な感染防止に取り組んできました。

主日礼拝には、説教者、司式者、奏楽者等、最小限の人数で集い、それをユーチューブで配信しました。具体的には、日曜日AM10時から主日礼拝を少人数で行い、AM11時からユーチューブでの配信を行いました。パソコン、スマホ等で見れない人のために宣教内容を分かりやすくまとめ、各教会員にも郵送しました。



また、主日礼拝プログラムについては、説教を短くし、交読文を省略、賛美歌を1・2節のみにする等、60分礼拝を40分に短縮しました。

緊急事態宣言が解除された後は、無理なき範囲での礼拝参加とし、コロナ感染防止を徹底した

大牟田フレンドシップキリスト教会 叶義文

上で、AM11時からの礼拝に戻し、必要に応じてZoomでの同時配信を行いました。

その他、礼拝前の歌の時間の中止、教会学校や祈祷会（水曜日）の中止や主の晩餐式をパンとブドウ汁をなくして、「主の晩餐式を想起する時」と位置付けて実施しました。

当然、マスク着用、体温測定（37.5度を超えた人は礼拝出席を遠慮してもらう）、入り口での消毒、空気の入替えや扇風機を活用し換気も徹底しましたし、新年会、母の日、父の日、イースター、クリスマス、特伝等、昼食会や茶話会も中止せざるを得ませんでした。

わたしたちの教会は、キリスト者奉仕会との関係も深く、障がいのある人たちも教会に来られます。施設の中には、高齢の方や基礎疾患を持たれている方が多く、感染してクラスターになると命に関わります。

このように感染防止に取り組む一方、教会の役割についても考えさせられます。教会とは神さまを礼拝する場であり、聖書の御言葉を聞く場であることは言うまでもありません。その上で、私たちの教会に来ている人の多くは「人との交流」を求めている人も多いように思います。お昼ご飯を食べながらの交流を楽しみにしている方も少なくありません。日常のさびしさの中、孤独の中、人とのつながりを求めて教会に来られます。

わたしたちがこれまで障がいのある人との関わりの中で大切にしてきたことは、人との交流であり、ふれあいです。そもそも障がいのある人と

の関わりは、食事・入浴・トイレ介助、また、会話したり、向き合い、寄り添う等、まさに密そのものです。

教会は神との交わり、聖書の御言葉を聞く場であると同時に、人との出会いの場であり、交わりの中にもあるのだと思います。人との出会いの中

「共に礼拝する」

私たちの教会ではコロナ禍の中にあっても、会堂に集まって礼拝を捧げること続けています。それには教会の所在地における感染者が比較的少ないことや、公共交通機関を使わずに自家用車で集まる方が多い事情もありますが、教会に集まって礼拝したいと思う方が多いことによると考えています。当初から感染対策として、講壇の前に飛沫防止のスクリーンをし、会堂に並べるパイプ椅子の間隔を広げ、窓を開けっ放しにして換気をし、礼拝プログラムの時間を少なくするために、賛美歌の回数を減らし、1番だけを歌っています。また、礼拝後の愛餐は中止しています。

普段は会堂に集まることを推奨していますが、これまでに3度、オンラインでの礼拝参加を推奨する期間がありました。市内に初めて感染者が報告され、全国に緊急事態宣言が発令された2020年4月12日～6月13日。市内で初めてクラスターが発生した2020年12月6日～13日。広島県に緊急事態宣言が発令された2021年5月16日～6月20日。自粛の呼びかけは臨時執事会を開き、解除は執事会提案を聖徒会（信徒会）で話し合って決めました。礼拝参加者の置かれている状況や思いは様々で、自宅やオンラインで礼拝を続けている方もいます。

でキリストと出会う、聖書の御言葉と出会うということも多いのだと思います。

感染拡大が続く中、教会が感染防止に取り組みながら、いかに神と人とを大切にしていける場として歩いていくのかが問われているのかもしれない。

緑の牧場キリスト教会 吉村 朋大

オンライン礼拝のツールは当初YouTubeライブでしたが、すぐにZoomに変更しました。理由は双方向コミュニケーションができるためです。礼拝プログラムの中で、子どものための聖書の話、分級礼拝（メッセージの深め合い）を持っており、週日のセルグループや聖書研究&祈り会、執事会や聖徒会にも活用しています。概ね上手くいきましたが、子ども向けの礼拝は別の時間に持った時期もありました。Zoom参加者による礼拝奉仕（司会や賛美リード）も試しましたが、通信トラブルが多いため止めざるをえませんでした。今は礼拝奉仕は会堂で参加されている方で担っています。

以前のように声をあげて賛美できないことは残念だという声は多く聞かれます。一方で、オンライン礼拝では家族の声が聞こえて家族で賛美をささげられるのは良い変化の一つだという声もありました。また、Zoomを使うことで、どこにいてもリアルタイムに礼拝に参加できるということは、便利です。オンライン礼拝をしている時には、自宅から教会に通う時間がなくなりました。パソコンやスマホを開いてZoomを起動すると、行きたい所に行ける、会いたい人に会えるのです。隣県や海外から礼拝に参加される方もいます。

このように良いことも多い一方で、便利な事が必ずしも良いことばかりではないと感じるこの頃です。以前礼拝説教でドライブインシアター教会の話を聞きました。人々は車で集まり、車に乗ったままカーラジオで賛美歌や説教を聴き、帰っていくそうです。オンライン礼拝がそのようになっていないでしょうか。オンラインで参加している時は会堂に集う人たちの姿が見えなくなり、会堂で参加している時はZoomで参加している方たちの姿が見えなくなっているように感じます。もちろんお互いの顔は見えているのですけれど。

「コロナ危機から示されたこと」

6月に3度目の長い緊急事態宣言が解除となり、待ちに待った共に主を賛美する礼拝が再開されました。この日をずっと待ち焦がれていた方がたに喜びと笑顔とが戻ってきました。それも束の間、7月末から再度東京から拡がりを見せる状況への懸念を受け、大阪でも8月2日から4度目の緊急事態宣言発出となりました。しかしながら今回私たちは、礼拝と祈祷会の場を閉じずに開き続ける新たな決断をしました。

1番の理由は、幾人かの教会の方がたや求道の方がたの深刻な魂の飢え渇きに直面したことです。3度の自粛期間中、その時々において出来得る限り礼拝プログラム、宣教原稿、礼拝音声データをメール、ファックス、郵送で送り、可能な方は訪問もしました。さらに、Zoomで礼拝に参加したい方が一人でもおられるなら対応

オンライン礼拝を始めた頃、子ども礼拝で「わたしたちは一つ」という賛美歌を歌っていました。礼拝する場所はそれぞれ離れていても、一つになって礼拝していることを思い起こすためでした。この原稿を書いている時に再び緊急事態宣言の対象区域となり、Zoom中心の礼拝に切り替えることになりました。いろいろと課題はありますが、同じ空間を共有することの貴重さをこれからもできる限り大事にしていきたいです。

日本バプテスト大阪教会 下川俊也

すべくZoomも用いています。けれども、皆がスマートフォンやパソコンを持っているわけではないし、操作もできるわけではありません。活字を読むのがしんどい方もいらっしゃいます。

特に心痛みましたのは、3度も繰り返して教会を閉じたことで、共なる礼拝が持てずに孤立感や霊的枯渇を強く覚える方がたが少なからずおられたのです。社会との繋がりが持ちにくい年齢や立場にある方は特にそうです。そうした方にとっては、たとえコロナ禍の不安が



あったとしても、信仰の共同体、主にある交わりが希薄になることから生じる恐れや喪失感の方が強かったのです。休会中、礼拝の時間前に「今日は礼拝ないのですか」というお電話を何度頂いたことでしょう。それは私たちの教会性を脅かし、損ないかねないような事態に対しての「天の声」であったのです。

今、インターネットの普及によって検索すれば自分好みの礼拝が視聴でき、また自分の好きな説教者の話も自由に聞くことができます。そこに、キリストのからだ性があるのか？私は誰と共に礼拝を捧げているのか？活きた信仰を建てあげていく共なる関係性があるのか？そう

いった問いかけが聞こえてきます。

主にあつて顔と顔を合わせ、自分の置かれた主の共同体につながり共に捧げる礼拝にこそ、み言葉の実践たる基盤があることを改めて示された思いです。今後も十分な感染対策をとって礼拝と祈拝会は教会を閉めず開き続けていきますが、礼拝出席に関しては「諸事情や体調面、又不安をお持ちの方は、どうか無理はしないでください」とお伝えしています。

「何よりもまず、神の国と神の義を

求めなさい。」（マタイ 6 章 3 3 節）

「その時を待ち焦がれつつ」

私たちは教会員 20 名程の小さな群れであるが、幸い子どもが多い。特にコロナ前は、共同保育など週日活動の参加者親子がたくさん礼拝に出席しており、大人と子どもはほぼ同数だった。礼拝中、教会のおじさんやおばさんに抱っこされる子も多かった。子どもたちは子どもも賛美を前に出て歌い、上級生が小さな子どもの世話をした。また、親たちは、子どもを託児に任せてほっとできる説教の時を憩っていた。教会学校の後に皆で昼食を囲み、気がつくとき夕方！？ということも珍しくなかった。コロナが発生したのは、そのような交わりの中で求道者が少しずつ起こされている時だった。

富士吉田バプテスト教会 宮西千晴

礼拝は試行錯誤の末、会堂とZoomの両方で行う形に落ち着いた。会堂とZoomが一つとなるために、Zoomの方も聖書朗読や献金祈禱、時には証も行なう。また、子どもメッセージの前は、双方の子どもの名前を呼び、一人一人声を聞く。そして最後に、司会者がスクリーンのZoom利用者と言葉を交わし、最後は会堂の皆がカメラに向かって手を振って礼拝を閉じている。また、礼拝のグループLINEは、週報や出欠の連絡だけでなく、ちょっとしたコミュニティーの場として活用されている。

さて、教会はコロナによって、様々なチャレンジの機会を得た。クリスマス礼拝恒例の降誕

劇は、動画に挑戦。それぞれが場面毎、登場人物毎に携帯で撮った動画を、東京に転居した中学生が編集してくれた。せっかくのチャンスとばかりに野外ロケにもトライした。例年と同じく子どもも求道者も教会員もその家族も出演、更に動画では遠方の方も参加できた。当日誰もが初めて観る完成動画に、歓声が上がった。またイブ礼拝は、聖歌隊やゴスペル（週日活动）はハンドベルに初挑戦。聖書朗読は思い切って物語調にして、中高生が影絵を上映した。おかげでzoomの親子も喜びを共有できた。それから、オープンチャーチは、礼拝後のピクニックに変更して行なった。長らくお休みしていた方だけでなく、新しい親子の参加も多くあった。今年は初の野外礼拝（幼児祝福式）を計画している。コロナがなければ、考えつきもしなかったことばかりである。

オンラインの導入で予想以上の恵みを得た。教会員にとっては礼拝ができるだけで喜びだろう。しかし、幼い子がいる方は別だ。zoomに託児機能はない。子どもをみながら画面に集中するのは至難の業だ。ある方は3ヶ月目に「もう我慢できない」と、お子さんを連れて教会に来られ、バプテスマを受けられた。これは教会の大きな喜びとなった。結果的に、子ども連れの求道者の数は減少したが、感染状況が良い時にはポツリポツリと再来し、また新たな求道家族も与えられている。子どもたちだけの出席もあり、大変勇気づけられている。

求道者の多くは「また教会に行って礼拝したい。礼拝の雰囲気が好きだから」と言われる。神の前に集められた者たちが、互いに協力し合

いながら、祈りを合わせ、共に賛美を歌う。そのような温かい「空気」の中でこそ、響いてくる聖書の言葉があるらしい。求道者から、礼拝の豊かさについて教えられた気がした。

コロナが明けたら、まずは皆で賛美を全節思いつき歌いたい。礼拝の賛美は神に「ささげる」行為でありながら、教えを「授かる」時でもある。そして、声を合わせて歌う会衆賛美は「共に」を実感させ、求道者を導く。そのような賛美の尊さを皆で味わいつつ、感謝の賛美を献げたい。それから平和の挨拶（賛美の間奏時、握手して挨拶）を再開したい。大人も子どもも意気揚々と手を差し出して会堂内を巡り、立ったままの求道者からも思わず笑みがあふれ、挨拶後の賛美の声は明らかに大きく活気付いていた。何より、誰もが安心して集い交わることができたなら！あの富士吉田教会らしい、生き生きした礼拝がなされる日を待ち焦がれつつ、今できることを一つ一つチャレンジしていきたい。



「歌わでやあるべき 救われし身のさち」

新型コロナウイルス感染から教会とその群れを守るために、長い間礼拝の捧げ方に配慮を強いられてきました。しかしながら、今、心から主に感謝をいたします。なぜなら、どんな状況であってもどんな形であっても、一度も礼拝式を欠かすことなく捧げ続けてこられたからです。

礼拝式は感染状況を見定めながら、従前の持ち方とは違う形式・方法でお捧げしています。教会員の中には教会に集い教友と共に捧げることを切望する方もあれば、何よりもお互いの感染を防ぐために自宅でのリモート礼拝が最善と考える方もあります。様々な希望や意見に耳を傾けながら、牧師はじめ役員会は臨時の役員会を数多く開き、その時々に応じて私たちの教会の礼拝の方向をきめ細かく決断しています。

基本的には緊急事態宣言期間中は、礼拝式はライブ配信のみとし、礼拝堂には牧師、奏楽者、主事、役員だけが出席して御用に当たります。宣言が解除された場合は、会衆が礼拝堂に集まる形も戻し、同時に配信も続けており、配信を受け取ることが出来ない方のためには週報そのほかの印刷物を郵送するなどして、礼拝式の様子をお伝えし、教会の群れのつながりを保つことに留意しています。

礼拝堂の礼拝式は元来一回のみであった形式を二部制にして一回の人数を減らし、所要時間は短縮して45分間としています。そのためにはメッセージの時間は死守しながらも、感染予防への配慮から賛美歌の曲数、節数を減らしています。また、礼拝式の大切な要素である主の晩さんを中止することもあり、証し等も礼拝式の中では無く月報に掲載する形をとっています。

百合丘キリスト教会 宮原淑子

密集を避けるために壇上は説教者と司会者のみとし、ソングリーダーも、若いリーダー



たちのプレイズチームも立っていません。会衆席には印をつけて密を避けて着席するようにし、賛美はマスクの下で控えめに歌っています。会衆は心からの賛美を声も高らかに捧げたい気持ちをぐっと我慢して、しかし賛美歌のことばの意味を味わいながら賛美しています。

聖歌隊の賛美もなく、練習も控えており、ほか、女声クワイア、独唱、子どもたちの賛美ももう一年半以上も礼拝で捧げられていません。生き生きと賛美を捧げることを喜びとしていた教会が今は少し静かな雰囲気になっています。

ライブ配信による礼拝は、昨年2020年3月末から初めて試みることになりました。感染の心配をせずに家庭において礼拝に与れるので喜ばれています。一方で、賛美の選曲で苦慮しているのが、著作権への課題から礼拝配信では使用できない曲があるということです。日本バプテスト連盟の「新生讃美歌使用許可申請不要曲リスト2021」（インターネット動画公開用）の中から選曲しています。ところが使用できない曲の中に、「今日のメッセージにはこの賛美！」という曲が結構あるのです。特に1950年頃以降に外国で作られた賛美歌はたとえ日本バプテスト連盟が翻訳や編曲権を有していても、他にも著作権を管理する出版社等がある場合は高額な著作権料を支払う必要が生

新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

じて、実際には使えない場合が多いのです。そんな賛美歌の中にこそ私たちバプテスト教会の信仰の証しになり、力を与えられて福音宣教へと押し出されるような賛美歌が多いのです。

この著作権による縛りにより選曲に制限がかなり苦慮してきました。けれども、なんとか豊かな賛美をお捧げしたいと『新生讃美歌』を繰っているうちに、今までにはあまり礼拝式で用いていなかった賛美歌の中に素晴らしいものを発見する機会ともなり、また使用できる賛美歌を最大限に歌いたいと思わされるようになりました。著作権ゆえに諦めかけていたプレイズの曲も、百合丘教会オリジナルや著作権フリーの曲を見つけて賛美するようになりました。

コロナ収束の日はいつになるのか今はまだ先

の见えない状況ですが、必ずや主がその日を備えて下さることを信じて待ち望みたいと思います。その日が来たなら、共に礼拝堂に会して礼拝を捧げたい、できることならマスクもはずして！高らかに賛美を捧げたい。節も省略せずに、ソングリーダーも立ち、若いプレイズチームの方々のリードのもとに生き生きとした賛美で礼拝式を始めたい。聖歌隊や女声クワイアの賛美を心待ちにしている人もいます。今は一人で担っている奏楽も、チームで豊かな礼拝音楽をお捧げしたい。希望をもって主への願いを祈り続けて行きたいと思います。こんな時だからこそ、「歌わでやあるべき 救われし身のさち」（新生讃美歌544）との思いを強くしています。

「新型コロナウイルス危機での礼拝の取組み」

福生バプテスト・キリスト教会 稲見元彦

福生バプテスト・キリスト教会は、緊急執事会を開催し、2020年3月8日（日）から、会堂での礼拝を中止し、ライン登録者（現在47名登録）のみ動画配信をし、一般公開はしないと決議され、礼拝参加者は、礼拝後ラインにて、出席の有無の報告をもらい、出席者数の把握をしている。3月29日（日）の礼拝から、牧師が司会、奏楽（PC新生讃美歌）を担当していたが、5月31日（日）の礼拝より、司会者、奏楽者を立てることになった。当初、操作が慣れない事もあり、動画を良く見ることが出来ない、声が聞こえにくいなどとの意見があった。その後、ラインの中でユーチューブ配信することが可能ということが分かり、ライブ配信用パソコンを購入することを執事会で決定し、ライブ配信メンバーを募り、ノートパソコンを購入

し対応したことから、問題は解決した。

教会での各集会は全て休止としたが、司会者、奏楽者、ライブ配信者、礼典執事は礼拝堂において礼拝を執り行うこととした。礼拝席上献金、月約献金、感謝献金等は、主日礼拝後また主日以外の日に各自持参し、礼拝堂で祈り、献金を捧げており、毎日曜日、礼拝後に献金集計者が教会に来て、集計し通帳に入れるという方法をとっている。ちなみに、礼拝献金等、席上献金、感謝献金等が前年より増えていることを感謝している。

主の晩餐式については、毎月第一主日に晩餐式を行っていたが、晩餐式も中止し、2020年12月6日（日）迄礼拝の中で「主の晩餐を覚えて」として、祈りの時とした。2021年1月より、各自家庭において、パンとブドウ液を用意してもらい、第一

主日礼拝時晚餐式を行っている。（晚餐式参加者の集計はしない。）

礼拝について教会員の共通理念は、「礼拝とは神に捧げる「労働」であるから、何処にいても神様に労働を捧げる事ができる」であり（願わくは、礼拝堂で礼拝を捧げることがベスト、）これは神様を褒め称える賛美をすることも、神様に労働を捧げているという意識です。今回コロナ危機において、家庭において礼拝を共にすることは「未信者の家族も共に礼拝への参加、また遠隔地（九州、和歌山、京都等）でも礼拝に参加できることに感謝」との声があります。

賛美については、家庭においても、『新生讃美歌』を礼拝堂で同じように心から大きな声で、賛美をしているということです。礼拝堂に

おいても、奉仕者のみですが、奏楽者に合わせて、心から賛美を捧げています。

福生バプテスト・キリスト教会の教会員として、医師、看護師が在籍しているため、今回の新型コロナウイルスに対する対応が、素人判断ではなく、専門家の判断を聞き、早くから対策を講じることが出来ていることを感謝している。今後、教会学校もライブ配信が出来たらいいと思っている。一日も早く、皆が一致して、礼拝堂で礼拝を捧げることが出来るようにと祈っている。



「コロナウィルスという出来事」

それがどのようなものであれ出来事には意味があり、そこには神のみ心が働き、ご愛が注がれると言います。コロナウィルスの存在を強く意識したのは、昨年3月の新礼拝堂・新園舎建替え完了直前の建築資材が入手困難となった際のことです。「まだ遠い存在」でした。ところが、昨年のクリスマス・イブ礼拝の一時間前、幼稚園の保護者の陽性確認があったことを知らされ、急遽礼拝を休止せざるをえませんでした。その際に改めて痛感したことは、教会が「地域社会の中の存在である」ことでした。保健所や行政の迅速な対応、保護者の方々の励ましのメールも多々ありました。地域にある「秋田友の会」の方々が、子ども礼拝の賛美のための手づくりマスクを、3、4、5歳児の大きさに合わせて

秋田バプテスト教会 村上悦二

届けてくださいました。コロナが内と外の壁を崩していると感じた瞬間でした。「礼拝」は、神さまが招いて私たちの群れを地域に起こし、育てられる神さまの働きであり、それ自体が地域の祝福の源となる宣教の場であることを思われました。

コロナに対する認識のギャップが存在していること、自粛することのできないご家庭が存在することを目の当たりにし、少し間違えれば分断を生じ瞬く間に信頼関係が損なわれる。その怖れを感じながら、刻々と変化する経験したことのないこの事態に、一体何が正しいことなのか的確に判断できないまま、不安と動揺を抱えたまま、それでも決断して進んで行かなければ

新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

ならない。そこには、「クラスターを発生させてはならない、不安の連鎖を断ち切らなければならぬ」という社会的使命を超えて、このような時にこそ神さまの息を深呼吸して吸い込む「礼拝」と「賛美」という応答が求められていると感じます。

丁度、礼拝堂が広くなりソーシャルディスタンスは取りやすくなったかもしれない。一時間の礼拝に凝縮されたかもしれない。アクリル板越し・ネット越し・書面越しの「宣教」、マスク越しの「賛美」になったかもしれない。換気や消毒、交わりの必要な措置も取られたかもしれない。突然の礼拝休止が、これからも余儀なくされるかもしれない。礼拝の在り方は刻々と

変化していくかもしれない。しかし、今までにない時の凝縮を憶えます。教会の内と外で不思議な交わりの近さを憶えます。先行き不透明なものを抱えたまま、それでも神さまが注いでくださるご愛と力が、何か新しいものを創り出してくださる期待を憶えます。



「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」

小樽バプテスト教会 エイカーズ 愛

数年前に小羊会のお泊まり会で小学生数名とリーダーたちと一緒に「礼拝」をテーマに学びました。礼拝は何のため、誰のため、礼拝の中になくてはならないプログラムは何？子どもたちと話し合う機会が与えられ、翌日の礼拝の中で子どもたちが、奉仕を捧げました。

あれから数年経ちますが、ようやくその時の子どもたちがパンデミックの中、聖書朗読事前録音を担ってくれることになりました。これまでは、このお泊まり会に参加した子どもたちは献金奉仕はしましたが聖書朗読は普段大人の司会者が担うため、なかなかそのような奉仕はできませんでした。他には、直接お会いしたことのない教会員のお孫さんでYouTube配信をされている若者に、電話で相談をし、動画編集、字幕

の付け方などのコツを伝授していただきました。最初は動画編集を近隣教会の先生に教えていただきました。札幌に住む地方教会メンバーの学生たちも助けて下さいます。宣教を録画する時、近所に住む20代の方が快く「これぐらいなら、いつでも！」と、会堂にお越しくださったり、観光関連会社勤務の教会員と、ぶどう園で働いておられる若いご夫妻も、タイミングが合うときは、協力して下さっています。若者が沢山いるように見えますが、現在会員の中では、40代半ばのわたしが実は若い方から数えて3人目です。

教会の役員で、お子さんがおられる熊野愛さんにコロナ感染状況下での教会についてインタビューをしました。この期間に感謝したこと

教会の事例紹介を受けて

は、会堂に集う礼拝時も、そうでない時も変わらずに会堂やお手洗いが掃除され整えられていること、また、どこで礼拝があっても、いろいろな方法で祈りを捧げることができ、爽やかな挨拶を交わすことができること、そして、週報を通して休んでおられる方々とも祈りの課題、聖書箇所など共有できている（メール、LINE、郵送、手配り）ことの3点と、パンデミックが始まってから変わったこととして、家庭礼拝用の聖書朗読、宣教の録画のために奉仕者が与えられたこと、そして、今年度に入り会堂に集う礼拝は基本的に30分の礼拝とした2点を挙げてくださいました。あるお子さんは「前よりも先生のお話ちゃんと聞ける！なんかいいね。」と言っていたそうです。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、不本意にも礼拝時間が短くなりました。最初に30分での礼拝を提案するまでに個人的に葛藤があり、執事たちに提案した時に一度は否決されました。しかし、引き続き祈り対話を続ける中で、30分であっても、まず礼拝を捧げることが今は選び取りたい、と一致することが出来ました。現在は、午後の会議もほぼ無い中、また、短時間ゆえに礼拝に出席が出来るようになった若いお母さんは、礼拝堂後方のホールで優しく子どもたちの見守りをして下さる方々のお陰で、「こんなにちゃんと聖書の御言葉を集中して聞くことが出来たのは何年振りだろう。ありがとうございます。」と帰って行かれました。3歳のお子さんが自分と同じ大きさぐらいある大きな熊のぬいぐるみを両腕に抱えて礼拝堂中央通路を前に歩いてきて、最前列で奉仕をしていたお母さんに見せた時は、思わず吹き出しそうになりましたが、そんな可愛い姿を見て会衆席におられた皆さんは目がハートになっていまし

た。イエス様が言われた「子供たちをわたしのところへ来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」との御言葉を思い出す瞬間でした。実に、ここは天つ世でしょうか、という程の上よりの愛と光が会堂に充満しているように見えました。

わたし自身、この新型コロナウイルス感染拡大期に礼拝と賛美で気づかされたことは、礼拝の長さや、前後の予定を目いっぱい詰め込んでいたことで、友だちを教会に誘うことや、路線バスを長時間利用して教会に来られる高齢の方々の送迎を通しての交わりさえ、難しくしていたということでした。もう一つは、小樽教会では長年、現在70代後半の方ほぼお一人にオルガンの奏楽奉仕をお願いしていましたが、その方がこの状況でどうしても出席できなかった時に、「この曲なら弾けます」という方と、前述の小さな子どもがおられるお母さんと、わたしの三人で急遽、一回の礼拝の奏楽を協力して取り組んだ経験から、これまで、どれほど一人の方の奉仕に頼りすぎていたかという気づきでした。今年8月には、約一年ぶりに、奏楽者養成と伝道のために月に一度続けていた賛美音楽レッスンも再開することができたことは感謝でした。その参加者の方々の中から将来、礼拝の奏楽を担うことができる方がさらに起こされますようにとの祈りを続けていきたいです。



(左最前列: スマートフォンを使い録画奉仕をする若者)

濱野 道雄（鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教授）

応答コメント

「ウィズコロナ」という言葉をよく聞くようになりました。新型コロナウイルスの変異株が次々現れ、今後も感染は何らかの形で繰り返すであろうと言われる中、コロナと共存していくという意味の言葉でしょう。私は「毒麦のたとえ」を思い出します。「主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで両方とも育つまみにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦のほうは集めて倉に納めなさい」と刈り取る者に言いつけよう。』」（マタイ13:29,30）コロナウイルスが毒麦だと言いたい訳でもありません。ウイルスはタンパク質のかたまりに過ぎず、もともと人間の住む場所には無かったコロナウイルスを環境破壊して持ってきたことが問題だったのですから。そうではなく、コロナの影響で礼拝においても、困った事は勿論、嬉しい事も同時に起こっていることが、今回の事例紹介で多く報告されており、その困ったと嬉しいを同時に、刈り入れの時まで、礼拝で経験し続けるのだらうと思ったのです。早急に、困った事を抜き去る訳にも行きません。そもそも、どれが本当に「毒麦」なのかも、私たちには完全には分からないのですから。勿論、困った事そのものを喜ぶような趣味はありません。やがて「毒麦」（困った事であって、困った人ではないでしょう）は焼かれ、神が「目から涙をことごとく拭いさってくださる」（黙21:4）希望が与えられています。ただ、今しばらくは本当に「困った

事」は何かを考え、それを乗り越えようと向き合う事が、実は礼拝を「美しく」しているのかもしれないのです。

小樽教会では、リモート礼拝のやり方で「困った」ために、近隣の牧師、学生といった方々の「嬉しい」協力関係が生まれています。また礼拝を短くせざるを得ませんでした、
「短時間ゆえに礼拝に出席が出来る様になった若いお母さん…3歳のお子さんが自分と同じ大きさぐらいある大きな熊のぬいぐるみを両腕に抱えて礼拝堂中央通路を前に歩いてきて…思わず吹き出しそうになりましたが…御言葉を思い出す瞬間でした。実に、ここは天つ世でしょうか、という程の上よりの愛と光が会堂に充満しているように見えました。」ここに、礼拝の美しさがあります。

「以前のように声をあげて賛美できないことは残念だという声を多く聞かれます。一方で、オンライン礼拝では家族の声が聞こえて家族で賛美をささげられるのは良い変化の一つだという声もありました」（緑の牧場）。「痛感したことは、教会が『地域社会の中の存在』であることでした。…コロナが内と外の壁を崩していると感じた」「礼拝の在り方は刻々と変化していくかもしれない。しかし、今までにない時の凝縮を憶えます」（秋田）。「教会での各集会は全て休止としたが…礼拝献金等、席上献金、感謝献金等が前年より増えていることを感謝している」（福生）。「休会中、礼拝の時間前に『今日は礼拝ないのですか』というお電話を何

度頂いたことでしょう。それは私たちの教会性を脅かし、損ないかねないような事態に対しての『天の声』であったのです」（大阪）。ここに、教会の美しさがあります。

最近、大学院生と「美学」についての本を読んでいます。東京藝術大学の布施英利さんは「美＝完璧×破れ」と言います。例えば、『モナリザ』が美しいのは、「完璧」な左右のシンメトリーが、絶妙に「破れ」ているからだそうです。そして実際、人間の身体もそのように出来ている。単純に「破れ」ていればいいという訳でもありません。「完璧」を目指す。しかしそれゆえに「破れ」る。そこに美が生まれると言うのです。神学者のルドルフ・ボーレンは『神が美しくなられるために：神学的美学としての実践神学』という本の中で、「教会において神は美しくなられる」と言います。ただし「教会は…醜いものと美しいものの混合体である。そのなかで神は美しくなることをお始めになるのである。美しさは醜いものの将来である。それゆえにパウロは教会を醜い者たちの集まりだと見ているのである。『あなたがた兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことをよく見なさい』（コリントの信徒への手紙一第一章二六節）。教会は…侮られている者、認められていない者たちの集合体であった。それが『キリスト・イエスにおいて』美しくなるのである！」と語ります。

この美しさを、バプテスト教会の礼拝はコロナ前から知っているのではないのでしょうか。「著作権のゆえに諦めかけていたプレイズの曲も、百合丘教会オリジナルや著作権フリーの曲を見つけて賛美するようになりました。」「こんな時だからこそ、『歌わでやあるべき救われし身のさち』（新生讃美歌544）との思いを強くしています」

（百合丘）。「コロナが明けたら、まずは皆で賛美を全節、思いっきり歌いたい。…声を合わせて歌う会衆賛美は『共に』を実感させ、求道者を導く。」「もう一つの願いは、平和の挨拶…の再開。大人も子どもも意気揚々と手を差し出して会堂内を巡り、立ったままの求道者からも思わず笑みが…、そして挨拶後、賛美の声は明らかに大きく活気付いていた」（富士吉田）。

あるカトリックの大変優れた技術を持つオルガニストの方は、常に完璧を目指していらっしゃいました。尊敬すべき方でしたが、ただバプテストの、時として「破れ」を持つ、芸術作品としては完成度が欠けるようになるかもしれない、それでも「共に」皆で歌う礼拝賛美の在り方を、あまり理解して頂けなかったことを思い出します。でも「美＝完璧×破れ」だとすれば、私はバプテストの礼拝の賛美は、美しいと思います。下手なのが良いというわけではありません。完璧な賛美を求める。でも皆で一緒に求める。そこに子どもたちの声が入る。そこに声にならない隣の人のうめき声が、ため息が、叫び声が入る。あるがままの一人ひとりの声が入る。だから「破れ」のように見える時もある。だから美しい。

「わたしたちがこれまで障がいのある人との関わりの中で大切にしてきたことは、人との交流であり、ふれあいです。そもそも障がいのある人との関わりは、食事・入浴・トイレ介助、また、会話したり、向き合い、寄り添う等、まさに密そのものです。」「感染拡大が続く中、教会が感染防止に取り組みながら、いかに神と人とを大切にしていける場として歩いていくのが問われているのかもしれない」（大牟田フレンドシップ）。アーメン！

賛美はすべての人を歓迎しているか？

江原美歌子

7/11～15、アメリカ・カナダ賛美歌学会オンライン大会に参加しました。大会のテーマは“Singing Welcome ? (賛美は歓迎しているか?)”です。昨年は、前政権による移民政策に対する抗議の表れか、人権問題が基調講演などで取り上げられていたことが印象的でしたが、今年は前回のテーマを踏まえた内容で、礼拝の賛美は「すべての人を」歓迎しているか？が基調となったプログラムでした。今年は、コロナ下での礼拝の課題について具体的な提案や今後の展望などが取り上げられるのでは？との予想に反して、コロナ対応の礼拝のあり方は語られず、一貫して礼拝の賛美の本質とその課題がテーマの中心とされていたのには驚き、その姿勢に学ばされました。実行委員会によるセッションでは、テーマの文言検討プロセスの振り返りがあり、“Singing Welcome”に“?”を加えたことで、このテーマに広がりを与えられたことが紹介されました。会衆賛美は本来、すべての人々を歓迎すべきものですが、それを「言わずもがな」ではなく、実際どうなのか？の問いを投げかけることは、これまでのあり方に真摯に向かい合い、問い直すことにつながっていくのではないのでしょうか。

賛美プログラムの中ではシンプルな言葉での賛美のお勧めがありました。様々な人種が集う礼拝にあっては、語彙が難解な賛美歌では、会衆賛美によって疎外感を受ける人がいるとの意識からくるものでした。日本における外国の方々と礼拝を共にする教会での取り組みと重なり響きます。

あるセミナーではLGBTQと賛美歌の課題が取り上げられ、性の捉え方が多様であること、これまでのように「性」を2つのジェンダーに限定するの

ではなく、自身が性をどのように表したいかを大切にすべきであることが語られました。大会では、講師によってはズーム画面の氏名表示の横に (he/him/his) (she/her/hers) 、それらにあたらない場合は (they/them/theirs) と、自認する代名詞が記されており、この実践は、会衆賛美の「会衆」には、どのような方々がおられるか、一人ひとりがどのように賛美の言葉を受け止めているのかを考えさせるものでした。

バプテスト連盟賛美歌検討委員会では、賛美歌を曲毎に検証する働きを開始し、今年度は拡大チームで作業を始めています。検証をもって賛美歌の言葉と向かいあい、これからの賛美歌推進について考えていきたいと願っています。

最後に紹介したいのは、Hymnary.Org 創設者 Harry Plantinga氏のプレゼンテーションです。Hymnary.Org は、賛美歌検索サイトで、私も賛美歌の背景など調べる際に、よく利用していますが、ここでは、新たに加わったプログラム “My. Hymnary” について紹介されました。従来の曲検索に留まらず、著作権情報、賛美歌の楽譜印刷、音源や歌詞投影画面提供など盛り込まれており、主日礼拝賛美のための準備や活動の一助となることが期待されています。日本からでも一部利用できるので、英文ですが、以下のウェブサイトから覗いてみてください。 (<https://hymnary.org/>) 感心したのは、この講師がコンピューターサイエンスの専門家として神学校の教授に就いていることです。これからの教会形成にあって、ウェブやデジタルは欠かせないツールとなっていくことでしょう。オンライン礼拝がコロナ後にあっても併用されることが多くの教会で検

討される中、専門家の協力をいただきながら、礼拝形成のためのよりよいデジタルツールが生み出されることを願っています。

この学会は来年100周年を迎え、7月に記念大会

がワシントンDCで計画されています。テーマは、“Sing the World God Imagines”（神がイメージする世界を歌う）です。早くも、このテーマからも示唆をいただいています。

きたかん奏楽者ひろばに参加して

東海バプテスト教会 和田温子

7/18に開催された「きたかん奏楽者ひろば」に参加しました。そのチラシには、「きたかん奏楽者のみなさまへ」と題し奏楽者ならではの悩みや情報交換など、きままなおしゃべりをしましょう！との趣旨が書かれていました。他教会の奏楽はどのように弾かれているのか知れる良い機会、しかも研修ではない「ひろば」「きままなおしゃべり」という甘い響きに申し込みを決意しました。

今回はZoomでの開催でしたが、私はこの日が初Zoom！自分の髪の毛を整え、さあログイン！と思ったら、ログインできず、慌てて参加されているS姉に電話をかけたりと、バタバタ遅れての参加（整えた髪はどこへやら）となってしまいました。しかも皆さんの話の途中で「すみません、遅れました」とタイミング悪く声を発し、尚更気まずい心持ちに…嫌な汗をかいている私に進行役のT姉が優しく「和田さん入れましたね、よかったです」と言葉をかけてくださり、なんとか落ち着きました。

参加人数は私を含めて8名。話を伺っていると、専門的な音楽用語でお話されているのを聞き、参加して大丈夫だったのかしら、と再び嫌な汗が…人知れず汗を出したり引かせたりと汗腺のトレーニングを繰り返しているう

ちに、若き奏楽者O姉が、明日の賛美歌の前奏に悩まれている、画面での実技指導が始まりました。会衆が歌い出しやすいために、どのような前奏にするか等、いくつかのアドバイスがなされ、同じ悩みを抱えている私にとっても、大変参考になりました。

次に進行役のT姉の「奏楽において、悩みはありませんか？」という問いかけに順番に答え、みなさん共通の悩みとして、「オルガンの速度と会衆の賛美とのずれ」の問題が出ました。その中で奏楽者は会衆をリードすることも大切であるが、それと同時に支えてゆくことも大切であること、テンポに正解はなく、譜面にはないブレスをも意識して弾くこと等、今後奏楽に臨む際に心がけてゆきたいポイントをいくつも聞くことができ、大変実りある時間となりました。気がつけば予定の21時をオーバーしての終了でした。

奏楽の奉仕をするたびに、いつも思うように弾けず、悩みは尽きない私ですが、他教会の奏楽者の方々と交わりを持つことで、励ましを頂いたり、奏楽をする上で、新しい気づきを与えられたりと、新たな気持ちで奏楽奉仕に臨むことができる機会を頂けたことに感謝致します。次回の集いも楽しみにしております。髪を整えて…。

「礼拝の動画配信と賛美歌著作権」

横浜ニューライフバプテスト教会 田坂 元彦

緊急事態宣言初回の昨年4～5月、私たちの教会は礼拝をオンライン配信のみとしYouTubeライブを使って教会サイトから誰でも観られるようにしました。その際、賛美歌著作権に配慮して礼拝で歌う曲は①教会オリジナルの曲か②著作権フリーの曲か③許諾を得た曲のみ選曲するようにしましたが、これは選曲担当者たちにとって大きな負担となりました。そのため、会堂での礼拝が再開した6月以降は自由な選曲に戻しましたが、並行して配信も続けることになったので、著作権に配慮したつもりでパスワード付きの会員向けページ内のみでキーワード検索しても探せないYouTubeの「限定配信」を使って、約一年続けてきました。

著作権の問題はこれで大丈夫かな？と思っていたのですが、今年6月『礼拝さいこう』『礼拝と賛美歌著作権Q&A』の記事を読んで、限定公開でも著作権使用許諾が必要だと知りました。さらに調べたところ、そもそも以前から続けていた「会堂での賛美歌詞スライド投映」にも著作権許諾が必要であることや、YouTubeの録画を手続き不要で残すには個人用アカウントを使う必要があることなどを知りました。そこで執事会で相談し、今後は教会のスチュワードシップの一環として、①著作権許諾の申請手続きをとり(必要なら使用料を支払って)選曲者がストレスなく曲を選べる環境を整える、②YouTubeアカウントは個人用に変える、③営利目的と誤解されないようオンライン参加者への振込献金の呼びかけは止める、④著作権上NGな音声を誤配信しないよう礼拝後すぐカメラを切る、⑤すべてのスライドに曲の出典と著作権情報を入れる、ことにしました。

①のうち外国曲についてはCCLI(国際キリスト教著作権使用許諾社)の年間ライセンスを購入しました。CCLI社は世界中で25万もの教会や団体が利用して

いて、英語の賛美歌やワーシップソングはほぼカバーしている(はずです)。料金は教会規模によって違いますが私たちの教会の場合50～99人の年間契約で歌詞スライド投映権 \$ 138+ネット配信権 \$ 70=計208米ドルでした。年52週で割ると週当たり4ドル(約450円)かかりますが、毎週4つの礼拝で計二十数曲選びますので、個別に許諾申請する手間を考えれば決して高くないと思います。実は私たちの教会では、伝道開始当初から礼拝の最後に「祝祷の歌」として「主イエスのめ



ぐみ」(『THE BAPTIST HYMNAL』 661 番 *Grace, Love, and Fellowship*のオリジナル日本語訳)を歌っていますが、この曲もCCLIに登録されていることがわかりましたので、今後は安心して使うことができます。

内国曲については個別に申請しています。『新生讃美歌』33番「輝け主の栄光」は訳詞者のスリヤ佐野一夫先生にメールで問い合わせし、シティプレイズの楽曲の無料使用許諾をいただきました。「花も」は北海道の愛隣チャペルに電話して尋ねたところ、「現在は著作権フリーで公開していますがスライドに“MEBIG”の文字を入れてください」とのお返事でした。

『新生讃美歌』16番「輝く日を仰ぐとき」や301番「いかなる恵みぞ」など中田羽後牧師の訳詞曲は著作権を管理している教文館に申請したところ、スライド投映権が1曲につき1回880円でした(配信についてはJASRACとYouTubeの取り決めにより申請不要)。

日本基督教団の所有・管理曲は2022/3/31までスライド使用申請不要です(但し「許諾済」とスライドに記載)。

JASRAC 管理曲のスライド投映については、JASRAC サイト <https://www.jasrac.or.jp/info/event/inst.html> に掲載の「非営利のカラオケ大会」に準じて申請不要と解し、私たちの教会では許諾申請せずに使っています。

なお©日本バプテスト連盟の曲のスライド投映は「申請不要」(手続省略)というのが教会音楽室の見解です。

オンライン配信の有無に関わらず、各教会で賛美歌詞をスライド投映する際には、どの曲にもスライドに出典と©著作権情報を入れておくと思います。

礼拝と賛美歌著作権 Q&A

Q : Facebookで礼拝の動画を配信しています。Facebookはサービス自体が著作権契約をしているので、自由に配信できると聞きました。『新生讃美歌』の収録曲も、どれでも使っても良いですか？

A: 礼拝の配信にあたり、諸教会でよく使われているサービスの1つがFacebookですね。他には、YouTubeやLINE LIVEなどもよく聞きます。それらの主要な動画共有サービスが、大手の著作権管理社と利用許諾契約を結び、利用者が使いやすくしていることも便利な点の1つです。『新生讃美歌』収録曲の中には、日本最大手の著作権管理団体であるJASRAC(一般社団法人日本音楽著作権協会)の管理楽曲も多く含まれています。JASRACでは、前述の動画共有サービス等と利用許諾契約を結び、一定の条件下ではJASRACの管理楽曲を手続きなしで使用することができるようにしています。例えば、自ら演奏した動画を生配信(ライブ配信)のみで使用する場合には、個人名義でも教会や団体名義のアカウントでも手続きが不要です。もし、生配信後にアーカイブ配信をする場合には、個人名

義のアカウントであれば、自演のもので広告や営利目的でない場合は手続きなく使用できます。同じ場合でも、教会や団体名義のアカウントの場合には手続きや使用料が必要になる場合があります。(詳しい条件や該当曲は、JASRACのホームページで確認、検索できます。)

なお、同じくよく礼拝配信に用いられている「Zoom」は、JASRACと利用許諾契約を結んでいません。配信に用いている環境と条件を確認し、権利を大切に守りながら、賛美歌を用いていきましょう。

詳細は、教会音楽室へご相談ください。

お問い合わせは 電話:048-883-1091(代)

メール:kyoukai-ongaku@bapren.jp

第6回教会音楽カフェの案内

9/7(火)、第5回教会音楽カフェではテーマ「グチった先に何見える？」

のもと語り合いました。初参加の松坂克世さん(静岡教会)のコメントを紹介します。

「各教会、また連合での取り組みなども紹介され、新しい出会いも刺激もありました。教会の人たちと会えない分、このようにして他の人たちと出会うということもまた、この状況の中で与えられたものと信じて感謝いたします。ただ、もう「コロナ」という言葉をわたしはできるだけ使わないようにしています。毎日聞いている(聞かされている)言葉だからこそ、もう聞きたくないし使いたくありません。そのような意味ではわたしたち皆が被災者でもあるのでしょうか。自分たちの現実ではあるけれども、そこから逃げるような部分(教会に行く、礼拝をする、賛美歌を歌うなど)でもあるのかなと思います。それを奪われていることにジレンマと諦めを覚えつつ、しかし抑圧されればされるほど聖書から希望を聞くのです。み言葉に開かれるということは、そのような現実には風が吹き抜けるようなことなのかなと思います。」

第6回教会音楽カフェは11月2日(火)19:00～21:00です。

テーマは「どうする！？これからの教会音楽 ～バプ連改革の中で～」

機構改革案が定期総会で提案がなされる中、今後の教会音楽の働きとそのあり方について関心が寄せられています。今回は「これからの連盟検討委員会」から2名が加わられます。さまざまな疑問や意見を通して、「これから」について語りあい、相応しい働きと可能性を求めてまいりましょう。お申込みはQRコードか以下のURLからお願いいたします。 <https://forms.gle/5sbm1GYSqgGy7iUM6>



新生讃美歌ブックレットを用いた研修会のご案内

コロナ下にあっては飛沫感染の心配のため会衆賛美には制約がありますが、賛美について「学ぶこと」には制限がありません。『新生讃美歌』を通して、礼拝、賛美、歌い方の工夫、著作権を一緒に学びませんか？

参加費：無料

第1回日程 2021年11月30日(火)13:00～15:00 (ZOOM)

内容:『新生讃美歌』ってどんな歌集？ 歌い方の工夫、賛美歌著作権

用意するもの:『新生讃美歌』、『新生讃美歌ブックレット』(500円)

『新生讃美歌ブックレット』購入は教会音楽室又は販売管理室まで。048-883-1091

著作権に関する質疑応答なども予定されています。ふるってご参加ください。お問い合わせはkyoukai-ongaku@bapren.jpまで、お申込みは以下のQRコードかURLからお願いいたします。 <https://forms.gle/p63ZsLieNUe3MGk7>

